
お父さんハウス

長崎秋緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お父さんハウス

【Zマーク】

Z0568F

【作者名】

長崎秋緒

【あらすじ】

父の仕事の都合で田舎に引っ越しになつたぼくと母は、驚きと恐怖の連続だった。

父の遺骨を納め、母は早く父の死を脇へと追いやりたいのか、しきりと冷たい飲み物がほしくないかぼくに訊いてくる。

ぼくはなるべく人の少ないお店を探し、通りに沿つて植えられた並木の繁りがこの暑さを防いでくれていてことに感謝し、日陰を歩き母の好きそうな、こじやれたカフェを見つけ、うだる炎天下に参つてしまい、その母の歪めた顔は、ぼくをびっくりさせるほど老けて映つたことは、父の死は母にとっては良かつたことなのかもしれない。

総合病院の精神科医師を辞め、開業をしたはいいが、父の『西野クリニック』は、人情味溢れ、しばしば経営という側面から外れた無計画な診療で、屋台骨といふべき患者からの報酬を“ツケ”で済ます。

そんな時代にそぐわないずさんな経営は、クリニックを二年で閉めることになった。その頃から父の行動性に異常なものを感じられるようになつていだが、当時のぼくと母は、ただ目の前にある自達の生活が否応なしの変化を強いられてしまつたことを、父の経営力のなさからなじり、引越しまでの短い時間を親しい友達と別れを惜しみやり過ごすのに精一杯で、そんな父の予兆に気がついてあげられる余裕などなかつた。

それまで住んでいた家は、生活に困るような不便さに出会う機会は何度かあつたものの、その不便さを引きずらない程度のことが殆どで、その土地の住み心地の良さは子供ながらに感じてはいたから「引越し」という言葉が父の口から出された時のぼくの驚きは、胸の内でひどく消化の難しい複雑な感情になつていた。

農業や家畜業が中心の、S市の端の方に位置するその町に、新しい住居を親子で見学に訪れた母とぼくの第一印象は、とてもじやないがここには住めない、という失望の思いで一致した。

居住区よりも田畠の面積が明らかに広い町は、まるで空氣に濃い臭いがこびりついているみたいに、いつまでも空氣から臭いが消えるということがなかつた。やたらにまかれた肥料と、家畜を飼っている家から漏れてくる動物の体臭と汚物、その他様々に混ざり合わさつた我慢ならない異臭で、町全体が覆われているみたいだつた。梅雨が過ぎる頃には一通りの引越しも済ませ、新しく通う中学校への手続きも終え、ぎこちなく通い始めた中学校での生活には、当初想像していたよりも、案外確執も起こさずに地元の子供たちに向かい入れられた。

転校してひと月の間に親しくなつた数人の友達を真似、その地方の言葉を普段の友達との会話の中に、最初遠慮がちに、その後はしだいにあからさまな強い意識から使うようになり、一度母親の前でその話し方をした時に、隣で聴いていた父の冷静な反応からは予想がつかない程、母親が怒りだしたのには、不意をつかれたのもあって、どうして自分が叱られているのか、それが母の言葉から出でてくるまでの間、ぼくは全く理解できずにいた。

「そんな汚い言葉は使わないで」

そう厳しく念を押されたぼくは、しばらくの間友達との会話にさえ方言を混じえることを止め、この地に越してくる前の言葉使いに戻していくが、夏休みも終わり、放課後の余暇を体育大会の予行演習に費やす頃には、ぼくはもう方言を駆使しなくては、この土地の荒っぽい喋りには対抗出来なくなり、この田舎の風土においては、ぼくの話す平たんな言葉よりも、抑揚の効いた激しく強い調子で捲くし立てる地元の喋りが適していることを思い知つてから、自然とぼくの声は大きくなり、ひび割れた感じの、母親に言わせると、「本当に下品」な声色に変わつていった。

そういう調子で人付き合いに関しては、自分でもなかなか好ましい態度で、先生や近所の大人たちに、いつの間にか顔を覚えてもらいい、うまくその土地に溶け込むことができていたように思う。

その後、この土地のあらゆる事において遠慮するものはなくなつ

たと感じられるほど生活に慣れてからも、脳の奥深いところに植え込まれた一つの恐怖感が、ぼくの心にはあった。

その土地には、中学校を卒業するまでの間住むことになったのだけど、とうとう最後まで慣れることが出来なかつたものがある。

ぼくの家は、海から少し離れたところにあつた。通学路にある防波堤のそばには、雨の降つた後、道路一面に力二の死骸が広がつてゐる。

雨水に呼び出され歩道にまで乗り出してきた力二達は、夜の間車に轢かれアスファルトにこびりつき、数日経つてもひび割れた甲羅に刻まれた笑い顔が、都會育ちのぼくには恐ろしく、いつまでも笑いかける甲羅の笑顔はある夜ぼくにこんな夢を見させた。

ぼくの部屋中に力二のつぶれた死骸があつて、引き出しの中にまでそれはあり、開けてもいらないのにぼくはそれを知つていて、目の覚めたぼくは、ふとんの上にもびっしり敷き詰められた力二の死骸に脅えいつまでも起き上がりことができずにいた。

そのうち母が一階からぼくを呼ぶ。仕方なくふとんをめぐると力二カラとそれは床に散らばり、ぼくはそれらを爪先立ちで慎重に踏まぬよう避けながら歩き階段を降りていく。

ぼくの臆病ぶりをたくさんのおじい甲羅をした力二達が笑つていた。ぼくは、今日は学校に行きたないと母に訴えたけど、どうしても休ませてはもらえず、家を出てすぐにほらみたことかと一人呴いてみせた。

道路一面に力二の死骸が、地平線の彼方まで広がつていた。これを全部踏まないよう歩いていたらどうせ授業には間に合わない、やっぱり今日は休んだ方が正解なのに。

ぼくはそれでもつま先を立て、おそるおそる、できるだけ下を向かないよう慎重に、やつぱり引き返そうかと何度も思い返しながらも、両足は休まず動き続けていた

ぼくの家は木造平屋建ての借家。以前は小さな商店をやっていたらしく、家の半分は売り場になつていて、レジのカウンターもそのまま、お父さんは、そこでなにかしら、商売を始めるつもりらしく、ひとり店舗の改装を行つてゐる。

お母さんは地域医療センターに精神科医の空きがあるから、素直に就職しなさいよ、と促していたが、お父さんは、もうあの仕事には就きたくないと、頑なに反対し、お母さんとの妥協の末、病院の清掃員として働きだした。

引越し当初、お父さんは庭でゴーヤの栽培を試みていた。七月から九月にかけて収穫のじきだったので、ぼくも借り出され、ぶさいくで、形もさまざま「ゴーヤは我が家の主食となり、毎日のようにチャンプルーがてきた。

卵とじも豚肉もはきらいではなかつたから、別に飽きることはなかつたが、父が園芸にはまりだしてからと、野菜の大概はそれで貰えるようになつていて。

「こちらの庭の土の養分が豊富なのだろう。何を栽培しても大抵は巧く育ち、その分の食費は浮き、お母さんは喜んでいたが、そのうちお父さんは、平屋建ての造りのまづい隙間から、次々と現れる虫達を捕まえて、これを食用にできないかと言い出してから、我が家 の食卓は急転換を向かえた。

まず、お父さんは畠に現れるダンゴ虫を捕まえ、フライパンで炒め始めた。これにはお母さんは激怒し、そのフライパンごと窓から放り投げてしまい、お父さんは夜中まで説教をくらつていた。

お父さんは病院の清掃員として働く傍ら、最近なじみになつた中国人のチョウさんと付き合つようになり、チョウさんは、六年日本に住んでいるにしては、言葉はカタコトで、それでもお父さんとの身振り手振りのコミュニケーションはとれていて、中料理屋を営む

彼が豚の骨についたわずかな肉をそぎとつて酒の肴に出していく、そのどんなものでも食い物のタネに変えてやろうといつ貪欲さに感化され、父はナメクジの食用の研究を始めた。

ちょうど梅雨時で思いつきで行動するお父さんのことだから、ぼくは放つておいたが、いつのまにかお父さんの助手に任命されたぼくは、なめくじの世話をすることになった。

薄暗くじめじめとした部屋の、以前店舗の物置に使われていたところをそのまま利用し、そこはお父さんの研究所みたいになっていた。

お母さんは陰臭いから部屋の模様替えを強行しようとしたが、そのつどお父さんの厳しい反対に押し切られ、今は諦めの境地に至っていた。

ある日、一番風呂をしていた母が、裸のまま風呂場から飛び出してきた。少女のような叫び声がぼくには意外だつたが、お父さんとおそるおそる浴槽を除くと、茹で上がった蛇が浮かんでいた。臭いも生臭く、つんとした感じで、その日ぼくと母はシャワーで済ませたが、お父さんは蛇風呂なんておつなもんだ、と蛇を窓から投げ捨て、蛇の汁の出まくった浴槽に長々と浸かっていた。風呂の排水溝から時々いろんな物が出入りしてきた。

お母さんはその日から、ぼくにお風呂の掃除当番を命じ、決して一番風呂はしなくなり、ぼくやお父さんを先に入らせ、安全を確認してからそれでも、過敏になつてお母さんはしばらく浴槽に浸かるうとはしなかった。

たまに排水溝から小さなカニが茹で上がり浮かんでいたりしていつから、お母さんはますますお風呂嫌いになつていった。

平屋建ての隙間からダンゴ虫やらゲジゲジ、ムカデ、いろんな虫が我が家を訪れる。

はじめのうちはいちいち、齧えティッシュ越しではないとつかめなかつたそれは、いまでは、素手でつかみ、手のひらで転がし丸まつたダンゴ虫等を窓の外へと放り投げる。

お母さんは、

「早く手を洗いなさい」

そういうけど、ダンゴ虫を触ったくらいでは手を洗うのがめんどくなつて、いたぼくはそのまま眠りに就く事もしばしばで、お母さんはますます、この田舎に越してきたのはぼくにとっては間違いだつたとお父さんにやつぱり都市部に戻りましょと説得していたが、ゴーヤの収穫期に入つていたお父さんにはそんなこと上の空で、大小形は整つていなが、味は悪くないゴーヤをお母さんに差し出す。しぶしぶ夕飯の用意を始めるお母さんがぼくに、「私お父さんが怖いわ」とこぼした。

ナメクジの研究のため、ぼくは学校が終わると、真っ先にナメクジ小屋へと入つていく。

母の神経症はこの頃からひどくなつてきた。

部屋の影になつてゐる箇所に、

「ゴキブリがいる」

そう幻聴を見るよくなつたのもこのころだつた。

お父さんは相変わらず、チョウさんと食用に出来る材料を相談してゐた。

チョウさんは、それ以外にも、日本人の独身男性に、花嫁を斡旋することもしていた。

田舎では嫁いでくれる女性も少なく、嫁不足に困つていたところに、中国人の若くてキレイな女性を紹介する。

男性の好みにあつた女性となるべくその要求に答えるべく、チョウさんは本国と連絡を取り合つていた。

チョウさんは中国から連れてきた従業員に日本人と変わらぬ賃金を与えていることでも、周りの日本人にも好評だつた。

お父さんの話によると大抵連れてこられた中国人は日本人の半額以下の給料で働かれるのだそうで、それだけにチョウさんの決して自己利益だけではない商売のやり方には、たいした知識をもつてないぼくでも、チョウさんは良い人だというイメージがあつた。

チエウさんに斡旋されてきた中国人の女性は、日本国籍が取得できるし、田舎の嫁問題も解消できるので、一石二鳥だつた。

チエウさんに紹介を受けて結婚した男性は十人を超え、ぼくの町では中国人をよく見かけるし、中国の商品を取り扱っているお店も何軒かあつた。

ナメクジの食用化のことだけど、お父さんが、「くらげのゼリーがあるなら、ナメクジでもいけるはずだ」と、ナメクジ調理セット？を使い、まずメスを使い、ナメクジの糞を取り除く作業にかかりた。それから、まず塩漬けにしてみようと味塩胡椒をふりかけたら、予想通り溶けてしまった。

こんどは砂糖で試そうと、お父さんは同じようにして、糞を取り除いたナメクジに砂糖をふりかけた。スプーンで半分ほど切り分けて口にして、

「意外といけるぞ、どうだ」

差し出されたスプーンを手で払いのけ、ぼくは宿題があるからといってその部屋を出て行つた。

そのことをお母さんに話したら、その夜となりの部屋から夫婦喧嘩の声が聴こえてきた。そういうえば、チエウさんのお店で貰つたお土産の”開口笑”というお菓子は美味しかった。ああいうのならまたチエウさんのお店にいきたいな。

ぼくが学校まで通う道筋は、できる限り田や畠の集中する場所を避けるようにしていたけれど、その田は友達の家まで迎えにいき、一緒に登校するつもりだったから、そこまでにある牛舎を突っ切らなければならなかつた。

牛の目の大さがグロテスクで、ぼくは牛が好きになれなかつた。横を向いているのに目だけはこちらを見ている。そんな時ぼくは下を向き、鼻をつまみそこを小走りに抜けて行く。

転校してきて初めてできた友達の幸一くんと並んで農道を歩く。前にはぼくの嫌いなタクミのグループがいた。

このタクミというバカは転校してきたばかりで何も知らないぼくに嘘のしきたりを教え、ぼくはジャージ姿で一人登校するといつぐマをやらかした。騙されるぼくもどうかしているとは思うけど、それだけではなくタクミは二年生で相撲部主将の兄の力を利用し、放課後ぼくと数人の一年生を体育館に呼び出し、バスケットゴールの真下に厚いマットを敷き、ぼくらに相撲部に入るよう命ぜた。

もし入部したくなればバスケットゴールのボードからマットへ飛び降りろという。集められた一年生は全員部活動をしていない子ばかりで、相撲部と相撲部でもないタクミのグループの連中がぼくらにどちらか選べと言らそうに命令する。

ぼくは早く家に帰りたかったので、体育館のはじごを昇り、ネットをぐぐりボードへ足をかけた。

下を見ると高さがより感じられて、少しどまどつたが、まわしを締めている自分の姿を空想し、それで気持ちを奮い立たせ、声を漏らさず飛び降りた。

マットに両足から落ち、しばらく仰向けになつて一瞬の恐怖を思

い出し噛みしめていたと、「おこ、早くじけよ

タクミの兄がぼくに帰つていいと言つた。

ぼくは言われるままに鞄を肩にかけ体育館を出て行こうとしたらタクミ達が出口を塞いでいて、「明日俺たちに来いよ」と勝手に約束をさせられ、どうせいくつもりもないから、適当に返事をして出て行こうとしたら、マットの敷いてある方が騒がしくなった。

ぼくの後に続いて飛び降りた子が、着地の勢いで、顔をひざにぶつけ鼻血をだしているのが見えた。タクミ達はすぐにマットのある方へ駆け寄つていった。その隙にぼくは体育館を出でていった。

次の日、昨日呼び出された内の一人がぼくに声をかけてきた。

「西野くんのせいで、ぼくらまでバスケットゴールから飛び降りなきやならなくなつた。誰もやらなきやそれで済んでたのに……」

ぼくはそいつの名前をまだ知らなかつたから、相撲なんて興味ないし、早く家に帰つたからやつただけだよ、とだけ言い返し、そいつをじつと見ていたら、そいつがぼくを睨み去つていった。

後で他の子を捕まえて昨日の続きを訊いたら、そいつは松下というらしく、最後まで飛び降りられなくて、下から怒鳴るタクミ達に脅え、ついに泣き出してしまつたそうだ。結局松下は飛び降りはやらずにするだのに、自分の恥をぼくのせいにしゃがつたので、ぼくは松下とは口を聞かないように決めた。

学校が終わり、タクミがぼくの席までやつてきて、取り巻きの連中に左右を挟まれるかたちで、ぼくは強制的にタクミの家に行くことになった。

タクミは簡単にいうと、勉強のできないバカで、なにかしら兄の皮を借り一年のボス？ にでもなりたいらしい。取り巻きの連中も似たようなモノだ。そんな性格だから、顔はぶさいくではないのに、クラスの女子に毛嫌いされていた。この辺は、小学校から中学校まで顔ぶれが変わることはないそうで、ぼくみたいな転校生でもなれば、誰もタクミには近づきたくないらしい。

タクミは家に向かう間ぼくにいろいろ質問してくる。前に住んで

いたところのことや、学校のこと。都会にでも興味があるのだろうかと、優しく質問に答えていたのがいけなかつた。それでタクミを調子に乗せてしまつたのだ。

タクミの家は漁業をしてこむれうで、家の前で網を編んでいるおばあさんが、タクミの名を呼んで、ぼくは丁寧に挨拶し玄関を上がつた。

タクミの部屋は一階にあつて、下の弟と同じ部屋で、一段ベッドの上をタクミが使つてゐるそつだ。

気がついたら、取り巻きの連中はいなくて、タクミがぼくにベッドに入るようになつた。

ぼくは訳が分からないまま、一段ベッドの上にのぼり、タクミも上がつてきて、ぼくらは一緒にベッドで横になつた。

タクミが何を考えているのか全く理解できないで、ぼくの頭は思考が麻痺したような状態で、タクミがぼくを抱きしめて、

「お前、いい匂いがするな」

背筋にものすごい勢いで寒気が駆け抜け抜けていつたのを感じ、ぼくは気分が悪くなり吐き出しそうになつた。

ぼくの異変に気づいたタクミはぼくをベッドから追い出し、帰りしなに、「誰にも言ひなよ。言つたらお前、わかつてるよな。俺達に勝てると思うなよ」

そう、悪人の言つ捨て台詞を言われても、じつちだつてこんな屈辱を誰が他人に話せるもんか。屈辱だ、屈辱だ。男に抱きしめられるなんて、しかも嫌いな奴に

これはもう復讐するしかない。ぼくは泣きながらホモタクミのことをさらご、さりご、もつと嫌いになつた自分を再確認するのだった。そして金土日の三連休前の木曜日。

ぼくは小瓶にナメクジをいっぱい入れて学校に持つてきていた。目的は簡単なこと。その日の授業はうわの空で、早く放課後が来ないかと待ち遠しくてしかたなかつた。給食の終わつた後を狙つてはみたが、さすがに何人かは教室に残りおしゃべりをしていたのであ

あらめた。

屈辱の日から一ヶ月待ったのは、より確実に復讐してやるために、三連休以上の休みがなければ面白くないことが起きたんじゃないと思ったからだ。

放課後、卓球部に所属する幸一くんを見送って、ぼくは一旦教室をでて、保健室のトイレまでいつしばらく時間をつぶし、頃合を見計りつてまた教室に戻ってきた。誰もいない教室は開放的な気分にさせ、ぼくの興奮も増してきた。

タクミは教科書を持つて帰るような奴ではないのは承知していた。タクミの机の中にはガチャガチャの人形やら、カードゲームに使うカード? こんな小学生が遊ぶようなもん持つてるとか、と呆れながらもぼくはしっかりとタクミの机の中身を物色していった。

右上に折り畳のついた答案用紙があった。めくつてみると数学のテストで、十四点……。バカにする氣も起こらない。

かわいそうになってきたぼくは、それでもしつかりやることはないのだった。

小瓶の中のかわいいナメクジの子供たちを給食の際、くすねておいたスプーンで取り出して、一匹ずつ引き出しの奥へと、放つ。自由の世界へお帰り。育ちを良くするために引き出しを水で湿らせてあげる。

だいたい一十匹ちかくのナメクジをタクミの引き出しへ移し、中身を元通りにして戻す。ちゃんと順番どおりに教科書も並べ、おもちゃの位置も元どおり、完璧。

「元気でね。月曜日に会おうぜ」

そう言い残し、ぼくはかっこよく教室を走り去るのだった。

夕飯時にお父さんが、

「寛^{ひろし}、なんかナメクジの数が減つてないか?」

「減つてないよ。ちゃんと毎日確認してるもん。それよりお父さん、お風呂の壁にナメクジがいたんだけど、あれはお父さんの?」

お母さんは、苦い顔をする。

「それはおれのじゃないな。勝手に育つたんだな。ここは田畠たりが悪いから環境がいいんだなきつと」

「毒キノ」「とか育てられるかな？」

「寛、いいぞ。キノ」「かあ、チョウさんに相談してみるかな」

「もうあの人と付き合わないでよ。わたしの嫌い。いかにも中國人って感じが」

お母さんは、お父さんがおかしくなったのはチョウさんの影響だと思っているらしく、親切にしてくれるチョウさん一家を快く思つてはいないみたいだ。

チョウさんの持つてくる野菜も、いつも生「」と一緒に捨てていることをぼくは知っている。大人の事情にこじもは口をはさみません。

明日から三連休。育て、育て、ナメクジ達よ。ああ、月曜日が楽しみすぎて、今日は眠れそうにないよ。なんだか無性に体を動かしてくなってきた。野山を野人のように駆けてやろうか。

休みの日、幸一くんに近所を案内してもらっていた時、浮浪者みたいなおつさんが近づいてきて、

「お前見かけない顔だな。どこの子だ？」

「行こう、寛くん」

幸一くんが、話しかやだめだとぼくを引っぱっていく。

おつさんはホモタクミのことらしく、本名は分からず、みんなタクオジと呼んでいるのだそうだ。いかにも漁師らしい、日焼けした顔つきに酒のにおいまでともなつて、あまりいい印象はつもない、浮浪者のような汚らしいよれよれのタンクトップ姿が癪にさわった。タクミのおじで、タクオジらしい。そのタクオジは、ノラ犬やノラ猫を捕まえては保健所へ持つていき、たまに首輪のついた飼い犬やらまで、飼い主の許可なくさらつっていくので、この界隈でペットを飼っている家は、タクオジの姿を見ると急いで家の中にペットを隠したり、睨みをきかせ追い返したり、ひどいのになるとホースで水をかける家もあるのだと、幸一君は自分の家の犬もタクオジにさらわれそうになつたのでものすごく嫌いらしい。

幸一くんは他人の悪口を言わない人だと思っていたので、タクオジはそこまでひどい奴なのだということが分かつた。

タクオジ本人は、保健所にノラを一匹持つていくと幾らかのお金を貰えると周りに吹聴していたが、後でお母さんに訊いたらそんなことないそうで、「寛、絶対にそんな人には近づいちゃダメよ」まるでぼくを叱るようなお母さんの態度に、ぼくは勝手にタクオジをホモタクミと重ねて毛嫌いするよつになつた。

ある日の浜辺、タクオジが砂浜で何かを焼いているのが見えた。なんとなく興味が湧きタクオジの背後から寄つていいくと、ボロのフライパンを火にかけていた。

フライパンの上には小さな赤いカニ達が踊り狂っていて、しだいに力尽きさらには深い赤色に変色していく。

フライパンから逃げ出そうとするカニをタクオジは、小枝の箸で押し戻す。縮こまつたカニ達から漂ってくる臭いでぼくは急に気分が悪くなつて、立ちくらむおもいと、ホモタクミに抱きしめられた時に全身を覆つた気持ちの悪さを思い出し、おもいつきりフライパンを蹴り上げた。

「バカオジ、死ね、バーク」

浜辺の階段を必死に駆け上がって、そこから振り返ると、タクオジは追いかけてこない。しゃがんだまま新聞紙の焼け、灰になり舞い上がるのをぼおつと田で追いかけるだけで、ひっくり返ったフライパンも、焼き殺されたカニ達にも無関心でいる。

どうやら本当にオカシイ奴らしい。でもそのしゃがみこみ呆けている姿はお父さんによく似ていると思った。お父さんはあんなに顔を赤く腫らしていない。都會育ちのぼくら一家は色白だから、日焼けしてもあはならない。あいつは地黒なんだ。お父さんはタクオジみたいにバカじやない。

ぼくは寂しくなつてきて、本当は幸一くんの家に遊びにいくつもりだったのを止め、引き返すことにしてた。

幸一君の部屋で新作の対戦ゲームをやる予定だつたけど、幸一君に無断で家に帰り、心配してくれた幸一君からの電話に風邪をこじらせてしまつたと答えた。

「お見舞いに行こうか？」

ぼくは即座に拒否した。風邪をうつしては申しわけないし、休み明けには直つているはずだからと付け加え、また今度遊ぶ約束をした。

お父さんの研究所のドアを開けると、その辺にいくらでも生えていそうな草が沢山あつて、コーヒーメーカーとミキサーが卓上に置かれ、何をしているのかたずねてみたら、精神の活発になる、良い薬を作つていてるのだ、とお父さんは答えてくれた。

どろどろの液体状のものが作られ、小瓶にロートを使い流し込む。しつかりふたを閉めた後、「絶対に、これを開けたりしてはいけない」と念を押され、益々好奇心の目覚めてきたぼくは、お父さんが仕事を出かけている間、研究室をくまなく探し、その瓶詰めにされた、濁つた液体を見つけることに成功した。

瓶の中を嗅ぐとひどく強い臭いがして、気分が悪くなりそうだったので、それでも何かの役に立ちそうだと考え、少量を拝借して別の小瓶におすそ分けしてもらつた。お父さんには内緒で。

お父さんは他にもこの田舎の地域になんとか“光”を繋げて、ネット経由で、海外から種子を買い、それを育てることを始めた。酒に酔つた時、

「アムスの賞を取ることが目標なんだ」そう、ぼくには意味の分からぬ言葉を口走り、その草は鼻にかかる刺激は強かつたが、とてもいいにおいが、心まで落ち着かせなくさせ、しばらくその場にじつと立つていると、自然に意識が朦朧としてきた。それに追随して興奮があり、無性に行動的になった。

お父さんは室内を真つ暗にして、蛍光灯の明かりを、その植物に当て、だいたい四ヶ月ほどで育つそうで、ぼくはそのお父さんの研究室を密かに「お父さんハウス栽培の場」と名づけていた。たまにその草の匂いをこつそり嗅いで、ふんわりと楽しい気分にさせてくれるそれは生活に欠かせないほど密着した習慣になり、ぼくは時々その草をすり鉢で液状にしたり、ベランダに干して乾燥したものを粉末状にしてスポーツドリンクと一緒に飲むようになった。

試験前の追い込みには重宝し、ぼくは一夜漬けでも、つねに学年の十番以内の成績を維持することができていた。

前にいた学校よりもここは学力的には劣っていたこともあり、ぼくは勉強のできる子という扱いになり、クラスの女子とも打ち解けるきっかけに宿題を手伝つたりしてあげていたら、いつの間にかぼくはクラスの男子の数人に恨みをかつていて、こどもじみた嫌がらせを受けるようになつていた。

下駄箱のスリッパがなくなっていたり、雨の日は傘が決まって盗まれるようになった。

だいたいの日星はついているのだが、証拠がなかつたし、問い合わせるためにシミュレーションにはいつも抜け道が見つかり、もつと確実に追い込むような理屈を考えていたら、その犯人は、ぼくが全く抵抗を示さない臆病者だと思ったのか、大胆な行動にでるようになった。

ある日、体育授業の前の休み時間に着替えをしようとしたら、スポーツバックの中に確かに前日の夜から入れていたはずの体操着がない。音楽の授業が一時限目にあり、教室の移動があつたので、たぶんその際に行動を起こしたのだろう。

それを予想済みのぼくは、鞄にもう一着体操着を用意していたのを、なんでもないよう装い着替え始めた。その間クラス中の生徒の表情の変化を探すべく、なるべく気づかれないよう慎重に、窓ガラス越しに教室全体のクラスメイト達の中にぼくを見ているものがいるかと目を配っていた。

松下が窓ガラス越しにぼくの方を見ているのが分かつた。他には女子の異性の体に抱く好奇心の眼差しがあり、ぼくは堂々とトランクス姿を披露してやつた。

クラスで真面目といわれていた、初井さんがまじまじと男子の着替え姿を見つめていたのに驚かされた。女にもそういう性への好奇心があることをその日ぼくは知つた。理想の中の初井さんは遠くへ行つてしまい、残念な気持ちになつた。

その日は体育館でバスケットの予定だつたので、バスケの苦手なぼくは時々体育館の倉庫に隠れ授業の終わりまで跳び箱の間に隠れやり過ごしたりするようになつていていたけど、その日はうまく一部屋先の視聴覚室に身を隠し、人気のなくなつたのを確かめ、教室の松下の机を調べ始めた。

さすがに机の中には何も見つけられず、バックの中も探してみたけど、ぼくの体操着はなかつた。まさかと思いつつゴミ箱をあさつ

てみたが、ない。

ぼくは見当違いをしていたのだろうかと、一度考えを整理するために自分の席に座り、ホモタクミの可能性も考えられるから、念のためにタクミの机も調べた。ナメクジ騒動で休み明け大騒ぎになつたクラス中の生徒達の慌てぶりが思い出され、あの時タクミの机から移動の範囲を隣の席まで伸ばしていたナメクジ達の被害にあつた他のクラスメイトには良心の呵責を覚えていた。

ナメクジ騒動についてタクミはぼくの仕業だとうすうす感づいてはいるはずだと警戒していたら、ぼくの想像を超える鈍感さだったタクミ達は、あのバスケットゴールからの飛び降りで、最後まで残された松下の仕業だと決め付け、松下は放課後タクミのグループに焼却炉の人気のないところに連れて行かれるのを幸一くんが目撃していく、ぼくに教えてくれた。それで、また松下がぼくを逆恨みしたのでは、と考えるようになつたのだ。

まさか焼却炉に放り込まれてはいないよな、とぼくは授業中の他の教室を前かがみで通り、体育館とは反対の焼却炉まで向かつた。焼却炉までの間には自転車置き場があつて、そこでふと、こがたな松下が自転車通学だつたことを思い出し、松下の名前が書かれているものを探し、前かごにビニールの袋を見つけた。

中にはぼくのゼッケンのついた体操着があつた。このまま体操着を持つしていくと、明らかにぼくが見つかったことに松下は気づくだろう。そこで、その体操着を犠牲にし、代わりにぼくは松下の自転車のタイヤの前後輪に穴を開けることにした。でも、道具がない。筆箱の中には美術の時間に配られた小刀こがたながはいつている。今から教室まで戻るのはさすがにリスクが高いと踏んだぼくは、ベルのうわぶたを取り外し、音が鳴らないようにしてやつた。ついでにチエーンもはずしておいた。手が油まみれになるのは承知のうえで、それでもチエーンのはずれた自転車を松下が見つけどう対応するのか興味があつた。

油まみれの手を、自転車のサドルで拭きながら、他にできそうな

「」ことないかと考えていたら、お父さんが最近栽培していた“草”のことが思い浮かび、ちょっとした実験台に松下を利用してやろうと考へた。

体操着はまた買つてもうればここやと売れる」として、ぼくはこつそりと保健室に向かい、体調不良を訴え休ませてもうひとつにじた。保健の先生から、担任に連絡が入り、ぼくは給食の時間を待たずして、早退せてもうつことになつた。

保健室で書いてもらつた早退届けを担任のこの職員室で渡し、気分の悪い演技をする。

担任は普段のぼくの真面目な態度を知つていてから、すぐにそれを受け取り、ちゃんと病院で診てもうつよつと念を押し、ぼくは額をおさえたり、ちょっと咳き込んでみたりして、職員室を後にした。下駄箱にはちゃんと靴がある。下駄箱の名前をはつたシールが剥がされてからだいぶ経つ。それも中途半端に西野の西が斜めに剥がされていて、汚いな、びつせならキレイに剥がしてくれたら良かつたのに。そういうのは嫌がらせる最低限のマナーだと、ぼくは定義づけていた。

前に隠された靴は傘立ての奥に押し込められてあるのをクラスの女子が教えてくれ、なんとかスリッパで下校することを逃れることができた。

タクミ達が、松下がやつたのかはしらないが、とりあえずはらいせにタクミの靴に彫刻刀で穴を開けてやつた。

家に帰るとお父さんは、もう仕事から戻つてきていた。

「寛、今度の休み、山にきのこ狩りにでかけるぞ。チフウさんの案内で食用になるやつをとりにいくから、これ呼んで予約しておきなさい」

ぼくはきのこ図鑑を手渡され、食べられるきのこいつも、毒性の高いきのこを重点的に記憶に留めるよつ努めた。

「お父さん。もう医者には戻らないの？」

今になつてどうしてそんなことを訊くのがとこいつな田で、お

父さんはぼくを見つめる。

「クラスの連中がね、お父さんは変人だつていうんだよ。あいつらの親よりもお父さんのほうが断然頭がいいのに。それがいやなんだよ。ねえ、精神科医に戻つてよ」

聞き耳を立てていたお母さんがとなりの部屋からやつてきて、洗濯物を手に、

「ほり、あなた、寛が学校で窮屈な思いをしてるじゃないの、わたし言つたでしよう?」

わたしだつて、じ近所から変な田で見られるし、どうして医師免許をもつてているのに清掃員なんかおやりになつているんですかなんて質問されて、わたしいつも答えに困るのよ」

お父さんは黙つてぼく達の言葉を聞き、まるで、患者にでも語りかけるような口調で言つた。

「もう少し様子を見てから考えさせてはもらえないかな。おれにはゆっくり自己の半生を省みる時間が必要なんだ。ゆっくりとした時間の中で、もう一度精氣を蓄えたいんだ」

お母さんは何も反論せずに、黙つて洗濯物をたたむ作業にかかる。ぼくも手伝わされる。

お父さんが“ハウス”に籠つてから、

「あの人、いつたい何を育てるの? そんなにお金になりそうな植物なの? 寛はお父さんから何か聞かされているの?」

そう質問責めにされ、ぼくにもお父さんの栽培しているものがなんのかは分からないけど、多分高値で売れるものに違いないよ。お母さんは高値という言葉に反応し、それ以上質問することはなかつた。心なしか、嬉しそうな期待感を漂わせていた。

お父さんが眠るのを見計らつてその葉をぼくは失敬しようと、その為の計画を、洗濯物を畳みながらイメージの中で予行練習を繰り返していた。

チヒウさんは食用のキノコと毒性のあるものとの区別ができるので、ぼくは適当につかんだものを確認してもらい、図鑑をめぐり正しいのかどうかをまた確認する。ベニテングタケがほしかつたから、お父さん達には内緒で探してはいたけど、なかなか都合よくは生えていない。

ぼく達は、家の裏庭にある獸道すらないような足場の悪い山の斜面を登っている。お父さんとチヒウさんが、キノコ狩りのついでに山菜もとっている。ぼくはベニテングタケがポピュラーな合法ドラッグだと図鑑でしつてから無性にそれを食べてみたいと思うようになった。幻覚に酩酊する感覚が病みつきになっていたからいろんなものを試したかったけど、結局田舎でのベニテングタケは見つけられず、ぼくは名も分からぬ図鑑にも載っていない白くて傘にイボイボした感触のある不思議なキノコをおみやげに持ち帰ることにした。

その夜はキノコ鍋をつくりで行うことになり、お父さんがチヒウさんも誘つたけど、お母さんのただならない殺氣を感じ取ったのか、チエウさんは籠かごいっぱいのキノコを持って足早に帰つていった。

夜遅く、ぼくは白いキノコの使い道を考えていた。自分で食べてみると視野に入れてはいたけどやっぱりためらわれ、クラスの連中の誰かで実験してやることに決めた。

ある日の給食の時間。ぼくは給食当番だった。タクミはあの時以来ぼくに興味を失つたらしく、未だに何であるなことされたのか理解に困つていたけど、もうぼくに構わないでくれるならそれも忘れたことにじてやることに決めていた。

それでも、いざ実験台にする人を考えると、ぼくは自然とタクミ/達か松下かしか思い浮かばなかつた。そういう時はどうしても嫌い

なやつにしか気持ちが向かわない。それに逆らって全く関係のないクラスメイトをえじきにできる奴がきっと無差別殺人なんてやれるのだと思つた。

ぼくにはその先に行く度胸は無かつた。苦肉の結論で、四人にそれぞれ白いキノコを与えてみることにした。

給食の一ヶ月分の献立をみて、一番適当なものを探すとカレーにすることにした。味が複雑だし、多少変な味がしても相殺できるくらいの強い味の食べ物だから、きっと大丈夫だろうとたかをくくつていた。

白いキノコは日干しにしたもので、やすりで粉末状にしていた。後はどうやってあいつらだけのお椀に忍び込ませるかが仮題だったが、いくら考へても名案が浮かばず、鍋に全部混ぜることにした。自分にもなにかしらの症状が顕れることは覚悟のうえだった。むしろ皆で体験できる期待の方が勝っていた。

給食が始まつて、誰もカレーの味に違和感を訴えない。あれ、量が足りなかつたのかな、と、さすがに一クラス分の鍋に一本分のキノコでは足りなかつたかとあきらめていたら、クラスの男子の一人が、「これなんか変な味しないか?」となりで席をとつている女の子に話しかけているのが聴こえた。女の子は自分のカレーをスプーンですくい食べる。なんにも変な味なんてしないと流す。ぼくは安堵する。鍋の混ぜ方がいい加減だつたから、必ず誰か固まつた部分を食することになるだろうと考えていた。

初井さんが急に青ざめた顔をして、たまらず教室を飛び出して行つた。それはぼくにとつては予想外で、氣のある初井さんにその害が向けられてしまつた不慮の出来事に良心が咎めた。

松下の腹がきゅるきゅると音を立て、教室内に聴こえるほど大きな音を立てた。たまらず松下もトイレに駆け込んでいった。それをみていたタクミ連中はすぐさま松下の後をおつていった。

トイレの個室で下痢をしている松下の音にタクミ達のいじめは創造性を駆り立て、トイレのドア越しにどんどんと扉を叩き、「おい

お前今うんこしてんだろ。臭いよ。松下のうんこは臭いって皆さんに言
いふらしてやるから」とバカにした笑いをトイレの個室に響かせる。

松下はドア越しにそれだけはやめてくれと懇願し、新発売のゲー
ムソフトを貸すからなんとか皆には内緒にしてくれと頼み込んだ。
「だめだね。それじゃあ対等じゃない」

じゃあ、何をすればいいんだよ。うちにあるものといつたら、ゲ
ーム関係とネットの情報収集の蓄積だと松下は落ち込んで、言
つた。

それに対するタクミ達の答えはひどく残酷なもんで、彼に金銭の
要求をしてきた。

さすがにぼくもそんな卑怯なやり方には反対派だったから、不本
意ながら、松下の擁護に回ることに決めた。

松下の弱点をまず知る必要が在る。ぼくが真剣に自分のことを心
配しているのだと勘違いした松下は、全てを話してくれた。過去に
ぼくに辛く当たったことも謝ってくれた。

そうして話をみると、思っていたほどには松下は嫌な奴では
なかつた。ただ皮肉家でマイナー思考だったから、ぼくの書く妥協
した、客と時代の流れに沿つた文章が嫌いだと打ち明けられた。以
前国語の時間に書いた小論文でA評価を受けたことを松下は律儀に
覚えていた。

そして、互いの誤解が解けても鍋のカレーに混入されたキノコの
粉末は取り除くことはできない、いつそやけになつて鍋ごとひつぐ
りかえしてやろうかともかんがえたけど、どうにも不自然な行為に
しかみられない。結局被害に遭つたのはタクミ達を含む八人だけで、
体に免疫でも持つているのか、タクミだけは違和感すらかんじてい
なかつた。取り巻きの3人は苦痛を訴え授業中何度もトイレに駆け
込んでいた。ぼくはそれとなくクラスの連中に赤痢ではないのかと
囁き、思惑通り三人のあだ名は赤痢三兄弟とよばれるようになつた。
結局ぼくは幻覚を楽しむことはできなかつたが、クラスの数人に
新しい快樂を教えてあげることが嬉しかつた。また機会があれば植

物混入をやろうと誓つた。

お父さんが清掃員の仕事をいつの間にかやめていて、新たに診療所を開くことをぼくら家族に告げた母の喜びようはいまもわすれない。

研究室に使っていた部屋を改築して畳みの部屋に変えた。お父さんは以前から研究していた薬草の知識を利用し、ホメオパシーに心酔するようになった。

ハーネマンという人が提唱した、類似したものは類似したものを治す、という類似の法則によると、毒を以つて毒を制す的なやり方は日本ではなじみが薄く、でもイギリス、フランスでは保健の対象にまでなつていて、一般に受け入れられている治療法らしい。

小さな砂糖粒に物質を溶かしたさまざまなレメディーと呼ばれるものをつくり、その種類は数えきれないほどあり、レメディーによる治療は、体に少しの毒物を入れることになる。毒物に対し体の抵抗が起こると、自己治癒力が高められ、病気が治るとされてはいるが、ホメオパシーには科学的根拠が希薄な為に学者からは敬遠されているともあった。

ぼくもレメディーには懷疑的な態度を崩さなかつたが、お父さんの解説した、ホメオパシーセミナーはおもに高齢者に指示され、一年もせずしてお父さんはホメオパシーの第一人者として崇められるようになつた。

まるで変な宗教のように毎週のようにつづきを訪れる年寄りが、お父さんに高額な治療費を支払っていた。

我が家の中はホメオパシー信者によつて高額になり、借家をでて、一軒家を建築する話ももちあがるほど荒稼ぎし、その田舎ではホメオパシーが一大ブームとなつた。田舎の年寄りは人柄が良く、騙すには格好の獲物だつた、とのちにお父さんが教えてくれた。パソコンに疎いじいさんばあさんのためにお父さんはいろいろア

ドバイスをして、特に必要も無いのに光通信に加入させた。その度に町の電気屋と連携し高額のパソコンを売りつけ、高いプロバイダーのセットに加入させ、ディベートを受け取っていたみたいだ。

じいさん達からひつきりなにくだらない質問の電話があり、お父さんは的を少しづつした解決策を提案する。しばらくしてまた別の不具合が起こると、その人たちから謝礼を受け取るようになった。その頃のお父さんは金儲けに夢中で、今まで肩身の狭い思いをしていた家族内での自分の立場を取り戻すために必死にそんなことをしていたようと思える。

お父さんは独学でレメディーを作り、それを一見高級そうな薬瓶に入れて、売り出した。レメディーには危ない面もあり、例えばトリカブトから摂取されるものもある。リン酸鉄は喉や風邪に効くと効能が謳われていたし、水銀が口内炎や歯茎の炎症、口臭に効くともあつた。それはとても鵜呑みにできるものではなくて、いくら海外で認知されていようと、ぼくはホメオパシーに対しても慎重な態度を崩さないよう注意していた。

お父さんのホメオパシーの会には高齢者が多く、お父さんの作るいかがわしいレメディーを彼らは疑わずに、高い金を支払い買つていいく。我が家家の経済状況は急激に上昇し、お父さんも近所ではちょっとした有名人のような扱いを受けるようになり、地方局の取材も受けるようになった。

お母さんは見直したお父さんにとっても優しくなり、夜中にお父さんとお母さんのセックスをする回数も、一ヶ月に一回あるかないかだったのが、周一周に増えていた。ぼくはふすま越しにお母さんの喘ぎ声を聴かされ、その頃からセックスというものに強い興味が湧くようになつた。ぼくもクラスの女子の誰でもいいから口説き落として初体験を済ませたいと考えるようになつた。思えばあれがぼくの性への目覚めのきっかけだったように思われる。

ぼくは初井さんと付き合いつになつた。まわりの冷やかしもあつたけど、関係はそこそこまくいつていた。

ぼくはセックスに興味があつたから、早くそれをやつてみたかつた。でも初井さんはぼくの頼みをきいてはくれなかつた。そんな時、別のクラスの女子に告白された。

富野さんというバスケ部の女子だつた。富野サンは積極的で、受け身な初井さんとは違つて、ぼくのようなセックスへの好奇心を隠そうともしなかつたので、富野さんと度々密会するようになつた。密会場所は富野さんの自宅で、母親と一人暮らしの富野さんの家は散らかつていた。富野さんのお母さんは片付けのへたくそな人らしく、本当は両親の離婚の時お父さんに引き取つてもらいたかったのだと、涙ながらにうつたえ、ぼくに抱きついてくる。いつものように富野さんと、畳の上に敷いたかたいふとんで裸になる。富野さんにもう一度してもらひのは気持ちよかつた。ぼくも富野さんのを舐めてあげる。ぼく達はもう数え切れないくらい何度もしていた。一度の密会で五回したこともあつた。ぼくのペニスはじんじんと痛みがあつたけど、またしばらくすると富野さんの体が恋しくなつた。

初井さんとも付き合いは続いていたけど、一向に进展は無かつた。ぼくと初井さんの関係を承知の上でも、ぼくのことを許してくれる富野さんはとても都合の良い存在だつた。

富野さんとセックスをしているからこそ、初井さんの前では真面目でいられたし、初井さんもそんなぼくを好きだといつてくれた。

富野さんに時々、もう初井さんとはやつたのかと訊かれる事があつたけど、ぼくはまだどこたえると、富野さんは勝ち誇つたようにまたぼくのペニスをこぎり、初井さんは在学中には無理かもね、と笑つた。

タクミ達が捕まつた。オレオレ詐欺を、近所の一人暮らしのおばあさん宅へ行い、振込み先の口座がタクミのいとこで、十九歳になる土木作業員のものであつたため、すぐにばれ、タクミ達のいなくなつた学校は居心地がよくなつた。

お父さんは地元の名物おじさんになつていて、怪しげな治療を行う注意人物にもなつっていた。ぼくとお母さんもお父さんの汚名の恩恵を受け、学校でぼくに近づいてくる人はほとんどになくなつた。借家を捨て、ぼく達は一戸建ての家を建てそこに住むことになつた。お母さんは喜んで、お父さんのレメディー作りに協力し、二人でいろいろな植物を探つてきては、新しいレメディーを開発していた。ある日、お父さんのセミナーの一員である初井さんのお母さんがトリカブトの毒で死んでしまつた。レメディーは薄めるほど効果があるといわれているもので、おそらく初井さんのお母さんは誤った療法をしてしまつたに違いない。それでもお父さんは警察に連れて行かれ、自然にセミナーは衰退に向かつた。会員も次々と退会し、後に残つたのは一戸建てのローンと、町中の軽蔑の眼差しだつた。

ぼくは初井さんから別れを告げられた。仕方のないことだと思つたが、富野さんにまで距離を置かれるようになると、自然と怒りはお父さんの方に向けられた。あっさりと出所することができたお父さんにぼくは死んでしまえと怒鳴つてしまつた。お父さんは前よりもふさぎ込み、お母さんの機嫌も悪く、ぼくまでハツ当たりで叱られる回数が増えた。

そんな時、ぼくは草で作ったクスリで気晴らしをすることが日課となつていたが、依存が強くて、日に一三回吸わないと、指先がふるえ、神経が高ぶるようになった。そういう時に学校の連中にいろんなイタズラをしかけ、気をまぎらわせていた。

年の暮れ、ビル清掃のアルバイトをしていたお父さんが一晩帰つてこなかつた。お父さんが家を空けることは珍しくも無くなつてい

たので、ぼくもお母さんもとくに氣にもしていなかつたけど、次の朝早く警察からの電話で起こされ、お父さんが溝に自転車ごと落ちて死んでいたことを知らされた。溝の水位は浅く、凍死だつた。酔つ払つて自転車で家に帰つてくる途中の事故ということで片付けられた。ぼくはその際に初めて死亡診断書を見た。殴り書きで死亡の原因を読んだ。そこに書かれている文字はとても簡潔であつさりとしていることに驚いた。

中学三年の中頃、ぼくはお母さんと都会に戻ることになつた。中途半端な転校で受験直前といつともあり、厳しい毎日だつたけど、知らないうちにぼくは体力がついていて、特にマラソンが速くなつていて、転校したばかりのマラソン大会で何の部活もしていないのに十三位だつた。ぼくはいきなりの注目を集め、それでぼくを目の敵にする連中には人知れずの制裁を加えてやつた。

お母さんは狭いアパートでホメオパシーセミナーを始め、ご近所の暇な主婦達を言葉巧みに丸め込んで会員にした。お父さんのやり方をしつかり覚えていたお母さんはそれで毎月の生活費とぼくの授業料を稼ぎ、おかげでぼくは大学受験も許してもらつた。

今、ぼくは大学一年生の夏を送つてゐる。お父さんの遺骨をこちらの納骨堂に移し終えたばかりだ。骨を収めるのにも金がかかると母は愚痴り、「死んでまで迷惑かける人ね」

とぼくに何か冷たいものでも飲んで帰ろう、とまた同じことを繰り返し言つ。

ぼくは覚せい剤の栽培をしていて学費くらいなら自分で払える稼ぎはあつたけど、母が忙しく働いているほうが嫌なことを考へる暇もなく、結果的に精神はたくましくなると分かつていてから、ぼくは架空の口座をつくり、時々その口座からお金を引き落とし同じゼミの連中と飲みにいつたり、旅行に行つて楽しんでいた。母にはアルバイトをしていると嘘をつき、ぼくは仲間のいる、皆で借りた六畳一間のアパートで暇をつぶしていた。

恋人もいたが、どれが本当に一番なのか分からず付き合つてい
て、うるさいことをいう女から切り捨てていった。不思議とぼくに
は女がよってきた。でもそれはぼくではなくぼくが栽培している
ものの強烈な魅惑のほうだということも自覚してはいた。でもそれ
で構わないと思つた。来る人拒まず、去る人追わずでこの先も生き
ていこうと割り切つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0568f/>

お父さんハウス

2011年9月11日03時23分発行